

日本語教育と関連分野との接点

～日本語学習者の日本語力分析を通して～

佐々木 美香

【卒業論文目次】

序章	研究の動機と目的	2
第1章	日本語の認識と位置	
1.	日本語と国語の認識	3
1-1.	日本語とは	
1-2.	国語とは	
1-3.	日本人の日本語力	
1-4.	日本人がとらえる「国語力」	
2.	日本語の位置	12
2-1.	世界の中での日本語の位置	
2-2.	日本語教育の歴史から見る日本語と国語	
第2章	日本語教育と国語教育	
1.	日本語教育に関する問題点	26
2.	日本語教育と国語教育	29
3.	日本語教育の文法と学校文法の相違点	36
4.	日本語教育の文法と学校文法の共通点	44
第3章	日本語学習者の日本語力	
1.	各種日本語能力試験の概要	46
2.	日本語学習者向けの各種日本語能力試験の分析	47
2-1.	日本語能力試験の分析	
2-2.	日本留学試験の分析	
2-3.	ビジネス日本語能力テストの分析	
3.	日本語学習者の日本語力	64
終章	研究の成果と課題	
1.	研究の成果	66
2.	研究の課題	68
	【引用・参考文献一覧】	69
	【参考資料一覧】	71

1. はじめに

研究の動機

インターネット情報や輸入品など、身近なところで「世界」を感じられるようになって久しい。これまで国際交流というと、英語を使いこなせることが大前提だと思い込んでいた。しかし、大学で日本語教育という分野に出合ったことでその考え方は覆された。自分が海を渡ることばかりが国際交流なのではなく、客観的に日本語を見たり、外国人に日本語を教えることも立派な国際交流の一つと考えることができる。

私自身、留学生のチューターや中国の清華大学での日本語教育実習を通して日本語教育と学校教育との違いをしばしば身をもって感じた。学校教育との相違はあるものの、日本語教育は「教育」であり単独の分野として存在しているとは言い難い。日本語教育について知れば知るほど、「日本語」について客観的に見る癖がつき、日本語を理屈的に考えると説明し難いことが多くあると感じた。

これらの経験から、普段使い慣れている「日本語」の能力や日本語教育と関連している分野との融合などを視野に入れた今後の可能性を探るきっかけになると考え、この研究の大きなテーマとして日本語教育を掲げた。

研究の目的

日本語教育機関数や学習者数、学習目的等の調査から日本語に対する意識や位置づけを考察する。さらに、日本語教育と国語教育を比較し、その相違点や共通点から応用できる分野や共通理解を示していくべき分野を模索していく。

海外のみならず日本でも日本語に注目する動きがある。このことからわかるように、日本語母語話者である日本人が日本語に注目しているということは、日本語に対する意識の変化もしくは言語そのものや価値の変化とも捉えることが可能である。

このような社会状況や意識の変化等を踏まえ、本研究では日本語教育の歴史や問題点など日本語教育の現状を知ると共に、日本語の位置づけや国語教育との関連性と可能性の拡大について見出していくことを目的とする。

2. 研究内容

第1章 日本語に対する認識と位置

私は、「日本語」と「国語」は感覚としては同じ意味合いをもつものの、そのとらえ方や役割は必ずしも同一ではないと考えている。そこで、本論を進めていく上での「日本語」と「国語」を複数の辞書を参考に定義づけする。

<第1節> 日本語の認識と位置

【日本語】にほんご

世界の言語の一つで、日本国で日本人が通常用いる言語。自国語という意味では一般的に「国語」と呼び、他の言語を区別して言うときには「日本語」と呼ぶことが多い。日本語は、敬語の発達や職業・年齢・性別などによる用語の違いが著しいなど運用面での特徴が目立つ。語彙の種類や表記法が複雑な点も日本語の特徴といえる。

【国語】こくご

ある一国における公用語としての国家語。国家が使用を国民に保証している政治的に選択した言語であり、かつ他国からその使用の承認をかちえている公の性格を担った言語。特に日本では日本語のことを指す。

<第2節> 日本語の位置

日本語は単一国家言語でありながら、世界の言語の中で使用人口第9位の言語である。日本語の使用人口や日本語学習者の増加という現実から見ても、日本語はもはや日本人だけのものではないことがわかる。日本語教育の歴史を参考にすると、世界の中での日本語の位置は日本語教育が始まった当初と比較すると上昇したと考えることができる。なぜなら、学習者を主体として考えたときに、強制的に教えられたものより、能動的・主体的に教わるものの方が日本語に触れる時間がより長くなることと、より深く学びたいという新しい意識が生まれると考えるからだ。その結果として、世界の中での日本語の位置は上昇すると考えるのである。ここで考える世界の中での日本語の位置とは、日本語がどれほど必要とされているかである。しかし実際問題として、世界の中での日本語の位置は国際的な場での使用頻度などになるのだろう。

ここで注意しなければならないのは、世界の中での日本語の位置が日本語学習者数や日本語話者数と比例しているという単純な考え方だ。国際的な場で必要とされる日本語についても考慮しなければならない。

第2章 日本語教育と国語教育

日本語教育と国語教育は「言語」を扱う領域ではあるが、全く同じ方法で行われるものではない。この章では、日本語教育と国語教育のそれぞれの特徴を挙げ、比較する。さらに両者の共通点や相違点から、特に文法項目における両者の融合や共有の可能性について模索する。

<第1節> 日本語教育に関する問題点

外国人が日本語を学習することで生じる問題点として次のようなことが考えられる。学習者に生じる問題点と、それに伴って教授する日本語教師に求められる力の二つに分けて考える。

◆学習者に生じる問題点（一部抜粋）

- ・母語の影響を受け、発音やアクセント、文章の組み立て等にくせが出てしまうこと。
- ・日本語教師が日本語の母語話者であるか、そうでないのかによって学習者の発音やアクセント等にくせが出てしまうこと。
- ・日本語の習得レベルが、学習者自身の学習レベルだと捉えられがちになること。

◆日本語教師に求められる力（一部抜粋）

- ・学習者の年齢層や学習目的が様々であるために学習者それぞれのニーズに合わせた教育をする必要のあること。
- ・日本語という言語教育のみならず、日本文化や日本のしきたりなど日本に関することを教授する必要もあること。

学校教育現場の中で日本語教育を必要とする外国人児童生徒の増加とそれに伴った対応ができていないことが大きな問題点の一つとして挙げられる。問題点についてはすぐに改善できるものもあれば、行政や教育、地域との連携が必要なものもある。例年の外国人児童生徒数の推移を見ると、今後も外国人児童生徒数は増加することが予想される。つまり、問題点が他にもさらに浮上し、複雑化していくことも考えられる。改善できるところは改善し、少しずつでも着実に学習環境を整備していく必要があるだろう。日本語教育と国語教育は同じ「日本語」という言語を扱う領域でありながら互いに啓発し合っていないことを課題に挙げる人もいる。日本語教育と国語教育の共通項の共有、啓発がもしかしたら日本語教育の可能性を広げることになるかもしれない。

<第2節> 日本語教育と国語教育

現在その必要性が叫ばれている日本語教育は、同じ「日本語」を扱う国語教育と比較してどのような特徴があるのだろうか。日本語教育の対象となる学習者、指導内容（音声、文法、語彙）、学習目的、学習目標、教授法、学習者の背景、学習環境、教師の8つの観点をもとに考える。

<第3節> 日本語教育の文法と学校教育の文法の相違点

ここでは数ある相違点の中でも特に文法に注目する。なぜなら、私たち日本人が日本語を教える時でさえ、日本語教育特有の文法があり、「日本人だから日本語を教えられる」という概念をしばしば覆されることがあり、覚えなおさなければならないからだ。なお、以後国語教育の文法については学校文法と呼ぶ。ボランティアで日本語を教えている人の中にはそのような「日本人なら誰でも日本語を教えられる」という考えをもっていた人もいだろう。しかし、私たちは普段、内側からしか日本語を見る機会がなく、外側から日本語の構造や機能についてなど文法的に考えることはほとんどない。

まず始めに、なぜ日本語教育の文法と学校文法は異なるのかについて考える。学校文法と日本語教育の文法の成立の相違やその成立に至るまでの背景の相違が、それぞれの文法の特徴に反映している。

日本語教育特有の文法は学校文法と比較して、文法用語や活用グループの分け方、活用形の名

称などに違いが見られる。

【日本語教育特有の文法用語】（一部抜粋）

国語教育	日本語教育	(例)
形容詞	イ形容詞	赤い, 美しい…
形容動詞	ナ形容詞	元気だ, はでだ…
副助詞	とりたて助詞	こそ, だけ…
終止形	辞書形	書く, 食べる…
連用形+接続助詞「て」	テ形	書いて, 食べて…
連用形+助動詞「た」	タ形	書いた, 食べた…

(山田敏弘 (2004), 『国語教師が知っておきたい日本語文法』, くろしお出版 p133より)

【動詞の活用グループ】（一部抜粋）

書く, 読む など	着る, 寝る など	する, 来る
I 型活用 五段活用 強変化動詞	II 型活用 一段活用 弱変化動詞	III 型活用 サ変・カ変活用 不規則動詞

(参考 国立国語研究所 (2001), 『日本語教育のための文法用語』, p38より)

学校文法ではもともとは文語文法（書き言葉としての古典文法）を対象にしており口語文法は後になって付け加わった。従って, 文語文法と口語文法のつながりが重視されている。一方, 日本語教育の文法は文語文法とのつながりを考慮する必要がないとされている。

活用形の名称に関して, 日本語教育では終止形（普通形の非過去の肯定形）を「辞書形」, 連用形+接続助詞「て」を「テ形 (te-form)」, 連用形+助動詞「た」（過去形）を「タ形 (ta-form)」, 連用形を「マス形語幹」, 仮定形+接続助詞「ば」を「条件形」と呼んでいる。このような名称が用いられているのは, 直感的で学習者にとってわかりやすく, 名称そのものが学習の助けになると考えられているからである。

先ほど学校文法は文語文法とのつながりを重視すると述べた。日本語教育の文法で I 型活用, II 型活用, III 型活用と呼ぶのを学校文法で下一段活用, 五段活用などと呼ぶのは, 文語文法とのつながりを重視しているからである。日本語教育で上一段活用と下一段活用の区別をしないのは, この区別を教えても習得上特に有効ではないと考えられているからである。

<第4節> 日本語教育の文法と学校文法の共通点

日本語教育と国語教育の比較, さらに日本語教育と学校文法の相違点について論じてきた。相違点ばかりが目につきがちではあるが, 共通点もある。日本国内の地域方言を基盤に持つ者が, 共通語を習得する時にも, 異なった体系を持った言語を習得するという点では第二の言語の学習

をすることになる。

このように考えていくと、日本語を母語としない人が日本語を習得するための日本語教育と国語教育は完全に離れた存在ではなく、どこかで接点を持っているものだと考えることができる。国語教育に日本語教育で生まれた教授法などの技術を導入する可能性も存在する。

第3章 日本語学習者の日本語力

各種日本語能力試験を参考にして、国語教育と日本語教育の関連性の可能性を探る手立てとしたい。各種日本語能力試験の分析をして日本語学習者にどのような力が求められているのかを検証し、その分析結果から日本語学習者に必要とされている日本語力を考える。

＜第1節＞ 各種日本語能力試験の概要

主な日本語学習者向けの3種類の能力試験を以下に提示する。

①日本語能力試験 ②日本留学試験 ③ビジネス日本語能力テスト

＜第2節＞ 日本語学習者向けの各種日本語能力試験の分析

今回は第1節で示した3種類の能力試験のうち、日本語能力試験についての分析結果を紹介する。

＜文字・語彙＞＜読解・文法＞＜聴解＞分野それぞれの出題内容や出題数を分析した。今回は＜読解・文法＞分野について紹介する。2級と1級では長文読解に重点が置かれている。「本文に題をつけるとしたら、どれが一番合っているか」という問題もある。日本語独特の言い回しは私たち日本人が普段あまり使用することのないものも多く出題されている。

＜第3節＞ 日本語学習者の日本語力

日本語を母語としない学習者にとって、日本で使われている文字を習得し使用できるようになることは日本語学習の大前提となる。日本語の文字を習得し、文を組立て、コミュニケーションをとる能力が日本語学習者の日本語力である。立場や場面を察して言葉を選択し使用する能力やテーマ理解、内容把握といった能力は第1章で定義した日本人の国語力に通ずる能力だと考えることができる。文学作品の読解問題ではないにせよ、求められているテーマ理解や内容把握能力は基礎的な文法問題などに比べるとはるかに飛躍している。

言葉は常に変化するものである。そのために日本語力をはっきりと定義づけることは難しい。私が考察した日本語学習者の日本語力から分かることは、基本的な技能が習得できていなければ応用的な技能や母語話者程度の技能を習得することはできないということである。逆に全ての技能を習得していたとしても、外来語の流入や若者言葉の氾濫などにより変化する言葉に基本的な技能が対応しきれなくなり、日本語力が崩れていくことも考えられる。

3. おわりに

終章 研究の成果と課題

<第1節> 研究の成果

本研究の目的は、日本語教育の現状を知ると共に日本語の位置づけや関連する分野との関連性と可能性の拡大について見出していくことであった。

日本語教育と国語教育の関連の可能性として考えられるのは以下の2点である。

まず1点目は、第2章の研究の成果からも挙げられたように、言葉に常に敏感な日本語教育の考え方を国語教育の中に導入していくことである。例えば、日本語教育は日常生活の中から題材を頻繁に抽出する。具体的には教室内の掲示物やごみの分別表、テレビから流れてくる音声などが挙げられる。これらはまさに生きた教材であり、言葉の変化に敏感な教材だと言える。

2点目は、逆に国語教育の考え方を日本語教育の中に導入していくことである。日本語教育は言語の分野だけではなく、言語以外の分野に焦点が当てられていることも多い。それは、日本語をある「手段」として学習している人も多いことからわかる。国語教育では、例えば古典など日本の伝統に触れる機会もある。これを日本語教育に導入して、学習者のニーズに合わせた教育を行うことも可能である。

第3章で明らかになった日本語学習者の日本語力については母語話者程度の技能というところから分かるように、日本語母語話者程度の日本語能力が求められる問題もある。現段階で日本語学習者向けの試験では文学作品は出題されていないが、学習者の多様化によって今年度試験が改訂されたように今後出題される可能性もある。そうするとやはり、国語教育の理念を日本語教育と共有していくという可能性も考えられる。

<第2節> 研究の課題

日本語教育と国語教育の主に文法分野についての比較を行った。今回は文法分野の比較を通して、両者の関連性やそこからみえる可能性についての考察をした。しかし、日本語教育や国語教育は文法分野だけではなく、他にも分野が存在する。それらの比較を行えばさらに両者の関連性や可能性の模索ができるだろう。この研究では、何度も日本語学習者の学習動機が日本文化にある人が多いと述べた。需要がある日本文化の海外への進出と日本語教育の現状を調査することが日本語教育の可能性を拡大するてがかりにもなるだろう。

また、第3章で分析した検定試験は3つである。日本語学習者の日本語能力を測定する検定試験は他にもあるし、今回参考にした年度以外の過去問題等も存在する。より多くの比較対象があれば求められる日本語能力の時代における変遷等についても見いだせるかもしれない。今回は参考にできなかったが2010年度から日本語能力試験が改訂になった。この改訂は受検者の多様化によってされたとの説明がある。これ一つをとっても求められる能力や学習者のニーズの変遷がわかるだろう。日本語を客観的に見るという必要性もあげられたが、日本人母語話者向けの各種検定問題を分析することで、日本語ブームの内容やその要因も明らかになってくるだろう。

先にも述べたように言語というものは変化していくものである。この研究に満足せず、今後も

言語に興味関心を抱くことが、言語の乱れを把握することにもなる。さらに世界の中での日本語の位置づけや価値の動向についても注目したい。

最後になりましたが、本論文を執筆するにあたりご指導くださった菊地先生、貴重な助言をして下さった研究室のみなさんにこの場を借りて御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

主要参考文献

- ・鈴木孝夫（1975）、『閉ざされた言語 日本語の世界』,新潮選書
- ・遠藤織枝（2006）,『日本語教育を学ぶ その歴史から現場まで』,三修社
- ・松岡弘,五味政信（2005）,『開かれた日本語教育の扉』,スリーエーネットワーク
- ・国立国語研究所（2001）,『日本語教育のための文法用語』
- ・国立国語研究所（1978）,『日本語の文法（上）』